

## 難波西鶴と

## 海の道

【32】

森田 雅也

黙みに、淋しく年月を送りぬ。

引き続き、西鶴の『日本永代蔵』元禄元(1688)年刊「巻四の四」茶の十徳も一度に商人相手に「えびす茶」に描かれる「小橋」と名づけて普通の茶を「利助」の話です。

これまでは、我がはたらきにて分限になり、人のほめ草なびき、歴々の乞聲にも願ひしに、「密方阿よりうちにて女房をよぼぼす、四十まではおぞからず」と、自分の物入りを算用して、銀の溜まるを

## 人付き合い絶え惨めな最期

もよく、立派な商家から縁談が持ちかけられるほどだったのです。

と云うが利助は、「密方阿(約十億円)貯まるまでは独身でいた。結婚など40歳までは遅くない」と、目先のもうけばかりを気にして、お金が貯まるのだけを楽しみとして、寂しくひとりぼっちの人生を送っていました。そんな月日を送っている。

それより道ならぬ悪心発りて、越中・越後に若い者をつかはし、搾り行く茶の煮辛を買ひ集め、京の染物に入る事と申しなし、吾茶にこれを入れませて、人しれずこれを商売しければ、一度は利を得

て家栄へしに、天こ茶を煮出した後の捨てれをとがめ給ふに「京都の茶染めに用いる」と触れ込みながら、その実は飲料用の茶に混ぜて売ったのです。

辛」と口をたたけば、「さてはあの分限、さもしき心底よ」と、人の付合ひ絶えて、薬師をよべど行く人なく、おのづから次第よわりに、湯水のかよひ絶えて、既に末期におもむき、「我今生の思ひ晴らしに、茶を一口」と涙を漏す。という事態になります。つまり、利助は正しい商いの道から外れて、悪い心が起きてしまったのです。

越中・越後に若い手代たちを派遣して、お茶を煮出した後の捨てた茶がらを買い集め、「京都の茶染めに用いる」と触れ込みながら、その実は飲料用の茶に混ぜて売ったのです。もちろん、一時はもうかりますが、天がこれをとがめたのか、利助は急に錯乱し、自分が行った悪事を園中に言い回り、「茶がら茶がら」とわめき立てました。すると、あの金持ちには下劣な心の持ち主だったのだと人付き合いが絶え、医者にも見放されて、体も弱り、湯水も喉を通らなくなつて、末期の水にせめてもお茶を一口と涙を流しました。惨めですね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

## 正しい商売の道を外れて